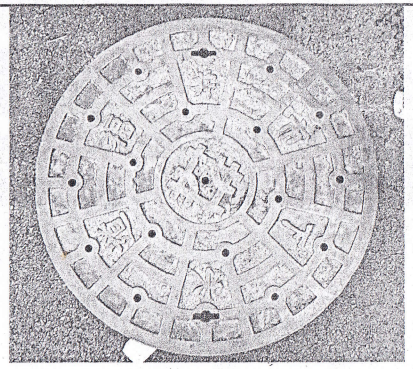
朝日新聞（夕刊）　2019年（平成31年）3月4日（月）

1998年製造、格子状

1980年製造、不死鳥デザイン



1975年製造の平ぶた＝いずれも福井市提供

マンホールのふた 人気底なし

福井市、老朽化品を販売 1枚千円 競争率45倍も

老朽化して役目を終えたマンホールのふた。一部の自治体が一般に向けて販売したところ、希望者が殺到している。足元にあって、日頃はあまり気に留めない鉄の板が注目されている。

福井市は1月15日～2月8日、直径約60センチ、重さ約40キロのふた10枚の購入者を募った。販売価格は1千円。福井市まで引き取りに来る必要があるが、宮城県や埼玉県など全国から計191件の応募があった。

不死鳥など描く

販売したのは4種類のデザイン。うち2種類には、戦災や震災からの復興を経験した福井市のシンボル、不死鳥が描かれている。2羽の不死鳥にダークブルーとライトブラウンを彩色したデザインが一番人気で、競争率は45倍にのぼった。

無彩色の不死鳥のふたが当たった静岡県磐田市の会社員松島睦典さん(64)は、10年ほど前から趣味の自転車旅行をするたびに、ご当地のマンホールのふたを写真に収めてきた。その魅力を「デザインから、地域を覚えてもらいたいという思いが伝わってくる」と語る。自宅の庭の飛び石の一つにしたいという。

福井市下水管路課によると、市内にある下水用マンホールのふたは約4万枚。1948年に下水道事業に着手したため、老朽化したものも多く、年間200～500枚を交換する。

これまで、使用済みのふたはリサイクル業者に売って処分してきた。1枚の価格はおよそ1千円以下。一般にも売り出したのは、下水道への理解を深めてもらう狙いがある。下水管路課の水上大輔さん(37)は「応募ゼロもあると思っていたので驚いています」。

前橋市を参考に

福井市が参考にしたのは前橋市だ。前橋市水道局が最初に目をつけたのは「マンホールカード」の人気。ふたのデザインや由来などを紹介するカードで、下水道関連の企業などでつくる「下水道広報プラットホーム」（東京）が、全国407自治体とともに計478種を発行している。

前橋市でも2016年に発行した市花のバラを描いたふたのカードが好評だったことから、実物を売る案が浮上した。「ふたなんて買う人がいるの」と半信半疑だったが、17年8～9月にバラや市章をあしらった10枚の買い手を各3千円で募ったところ、193件の応募があった。

なぜ、ふたが売れるのか。全国のふたメーカーでつくる「日本グラウンドマンホール工業会」の担当者は「土地固有の名産品や観光地などが写実的に描かれたり、色づけされたりしているのは、日本ならではのこと。日本独自の文化として人気を集めているのではないか」と話している。

（平野尚紀）

不死鳥がデザインされ、倍率45倍の一番人気になったマンホールのふた（1999年製造）＝福井市黒丸町、平野尚紀撮影